後拾遺和歌集

男に忘られて侍りけるころ、貴船に参りて、御手洗川に蛍の飛び侍りけるを見て詠める

和泉式部

もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る

新古今和歌集

男ども詩を作りて歌に合はせ侍りしに、水郷の春望といふことを

見渡せば山もと霞む水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ

後鳥羽上皇

（巻一・春上）

千五百番歌合に、春歌

薄く濃き野辺の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え

宮内卿

（巻一・春上）

題知らず

誰かまた花橘に思ひ出でむ我も昔の人となりなば

藤原俊成

（巻三・夏）

西行法師勧めて、百首歌詠ませ侍りけるに

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

藤原定家

（巻四・秋上）

摂政太政大臣家歌合に、湖上の冬の月

志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月

藤原家隆

（巻六・冬）

百首歌の中に、忍ぶる恋を

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

式子内親王

（巻十一・恋一）

西行

東の方へ修行し侍りけるに、富士の山を詠めるに

風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな

（巻十七・雑中）